様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６５１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１７５８２

研究課題名（和文）当事者経験から構築する「母乳育児に関する情報提供支援プログラム」の挑戦的開発

研究課題名（英文）Challenging development of an 'information and support program on breastfeedign' to be constructed on the experiences of mothers

研究代表者
濱田　真由美（Hamada, Mayumi）

東京慈恵会医科大学・医学部・准教授

研究者番号：３０４５８０９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：研究参加者は初産婦４名であった。研究者は彼らに定期的にインタビューを行いデータを収集した。インタビューは、妊娠後期に１回、産後は２週間から離乳までの5～6回、計６～７回行った。妊娠３７週時点で全員が母乳育児を行うことを希望していたが具体的な方法については情報を得ていなかった。その代わりに友人や姉妹といった身近な人から体験を聞き判断材料にしていた。産後早期は１名が完全母乳栄養、３名が混合栄養であり、助産師のアドバイスに従っていた。しかし時間が経つなかで、状況や自身の考えが変わり、母親自身と子どもにとって良い授乳方法を見出し、離乳を迎えていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、妊娠後期から離乳までの長期に渡る母親の母乳育児体験を明らかにした。本結果から、妊娠期や産後入院中、退院後に助産師が母親にどのような支援を行う必要があるのかを考えるデータとなる。特に、病院に勤務する助産師の多くは、産後1か月以降の母子に会う機会がないため、入院中の母子がどのように変化し離乳を迎えるのかを理解する一資料になり得る。また、これから母乳育児を経験する女性にとっても、母乳育児の実施と産後の状況の変化により移り変わる考えや授乳方法について実際を知る機会となる。

研究成果の概要（英文）：The study participants were four first-time mothers. The researchers interviewed them regularly and collected data. Interviews were conducted once in the last trimester of pregnancy and five to six times postpartum, from two weeks to weaning, for a total of six to seven interviews. At 37 weeks' gestation, all were willing to breastfeed but had no information on specific methods. Instead, they heard about experiences from people close to them, such as friends and sisters, to help them make decisions. In the early postpartum period, one woman was on full breastfeeding and three on mixed feeding, following the midwife's advice. However, over time, the situation and their own views changed, and they found the best way to feed their mothers and their children and weaned themselves.

研究分野：母性看護学

キーワード：授乳支援　母乳育児　母親　経験　体験

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

1991 年以降、WHO/UNICEF は母乳育児促進運動を展開し、生後 6 か月までの完全母乳育児および生後 2 年以上にわたって母乳を与え続けることを推奨している[WHO, 2017]。日本においても母乳育児は子どもの健全な育成に欠かせない授乳方法として推進されてきた。2015 年度より試行された『健やか親子 21（第 2 次）』では、「すべての子どもが健やかに育つ社会」の参考指標の 1 つとして、1 か月児の母乳育児割合が挙げられている[厚生労働省, 2015]。しかし、厚生労働省が発表した『平成 27 年度「乳幼児栄養調査」の結果』によれば、10 年前に比べ完全母乳育児の割合は増加したものの、妊娠中に母乳で育てたいと思っていた母親（93.4%）のうち、実際に完全母乳育児がおこなえた母親は約半数（51.3%）に留まった。

母乳育児が簡単な授乳方法ではなく、むしろ困難に満ちたものであることは、先行研究において共通して見られる結果である[Andrews & Knaak, 2013; Fahlquist & Roeser, 2011; Hegney, Fallon, & O’Brien, 2008; Palmer et al., 2012; Powell, Davis, & Anderson, 2014; Schemied & Lupton, 2001]。乳房・乳頭の痛みや睡眠不足、授乳に伴うライフスタイルの変化や制限、「母親」としての自己価値の低下といった身体的・精神的苦痛は、母乳育児をおこなう女性に総体的に見られ、アメリカやカナダ、イギリス、スウェーデン、オーストラリアといった文化や経済状況が異なる国であっても共通していることが指摘されている[Debevec & Evanson, 2016]。

母乳育児に困難感を抱く要因の 1 つは、母乳育児推進に付随する言説にある。母親が子どもを母乳で育てることは「自然（natural）」なことであるという言説[濱田, 2012; 梶谷, 2010; Wall, 2001]は、妊娠した女性たちに母乳育児は簡単で楽しいことだと思わせているという[Holmberg, Peterson, & Oscarsson, 2014; Tarrant, Dodgson, & Wu, 2014]。そのため、母親は前もって学習したり準備したりすることのないまま、予期していなかった母乳育児の困難や身体の痛みに出産後はじめて直面し、ショックや自信喪失、失望といった感情を経験することになる[Brouwer et al., 2012; Marissa, Claire, & Eileen, 2012; Millward, & Berger, 2012]。さらに、母乳育児のメリットを強調する「医学モデル」の情報提供は、人工乳を与えることは子どもにリスクをもたらす「悪い母親」であるという自己非難を招き、母乳育児が困難な母親に追い打ちをかけている[Lee, 2007; Murphy, 1999; 嶋岡・岸田, 2005]。母乳育児についての妊娠中のイメージと産後のギャップや「医学モデル」によるメリットの強調は、母乳育児への困難感を増強させ[道谷内ほか, 2008]、母親としての自信も失わせてしまっている。

近年、核家族化や地域の希薄化などによって、家族や地域のなかで子育ての知恵や経験を共有することが難しくなっている。したがって、母親の困難感を軽減させ、喜びが感じられる子育て期にするための 1 つの手立てとして、母乳育児に対するレディネスを高めることが挙げられる。提供する母乳育児情報を具体的で現実的、遂行能力や問題解決能力が高まったと感じられ、母親としての自信がもてる内容に刷新することが求められていると考える。

２．研究の目的

本研究の目的は、産後に生じ得る母乳育児の困難感や負担感を予防・軽減するために、授乳する母親の視点に立った妊娠期の「授乳に関する情報提供支援プログラム」を構築することである。近年、育児に悩み自殺する母親の存在が大きな社会問題として浮上し、とりわけ母乳育児がイメージ通りにできない場合に母親が味わう苦悩は深刻である。そこで妊娠期から離乳までの母親を追跡することで、当事者である母親の経験から現状に基づいた情報提供を開発する。本研究は、「当事者経験から構築する『授乳に関する情報提供支援プログラム』の開発」の第 1 段階に該当し、当事者経験を明らかにするものである。

３．研究の方法

（１）研究デザイン

ライフヒストリー

（２）研究参加者・目標症例数

東京都内の分娩を取扱う一般病院に通院し、妊娠経過が母子ともに正常な妊娠後期の初産婦 4 名。

（３）分析方法

Thematic analysis を行った。インタビューデータはケースごとに時期別にカテゴリー化し、ストーリーラインを描き分析した。次に、個々のケースの分析結果を比較した。

４．研究成果

本研究における主要な成果は以下の通りである。今後、論文にまとめる予定である.

（１）初産婦の妊娠後期から離乳までの授乳に関する体験

（２）初産婦が授乳に関して感じた困難と解決策の実際

（３）初産婦４名の体験から看護職者に求められる情報提供等の支援

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 濱田 真由美	４．巻 75
２．論文標題 特集 母親と助産師の経験から授乳支援を考える 「母乳育児の困難さ」はどこから来るのか-母親と助産師の経験を通してより良い授乳支援を考える	５．発行年 2021年
３．雑誌名 助産雑誌	６．最初と最後の頁 827～834
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11477/mf.1665201919	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 濱田真由美
２．発表標題 Literature review regarding antenatal breastfeeding education designed to alleviate difficulties in breastfeeding
３．学会等名 WAIMH 2018（14ｔｈ World association for infant mental health World Congress）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関